

異世界に転生したらカ
ントの聖女だった件、
神殿騎士団長に「神託
だ、お前の身体は俺が
清める」と祭壇の上で
毎夜浄化される話

「っ——、」

声にならなかった。股間に視線を落として、瀬良宗介は息を呑んだ。深夜バイトの帰りに階段から転落して、気づいたらこの身体。男のままのはずの胴体の下に、割れ目がある。男性器がない。代わりに、柔らかな肉の裂け目。

（は……？ なん——何だよこれ……っ）

壁に映った裸体が震えていた。どの角度から見ても映っている。股の間の——ない、あるはずの、ない——。

足音が響いた。

重い靴の音が円形の間に近づいてくる。暗がりの中から白い外套の男が現れた。大きい。背丈は二メートル近く、鉄色の短髪、左頬に白い刀傷。その薄い青の瞳がセラスの裸体を一瞥して——何の表情も動かさず、肩から外套を外した。

白い布がセラスの身体にふわりと落ちる。男の体温と、微かな金属の匂い。

「お前が、第七聖女か」

感情のない低い声。

「せい——じょ……？ 待ってくれ、俺は」

「喋るな。身体を冷やすな。侍女が来る」

それだけ言って男は背を向けた。外套を失った広い背中が暗い壁に映り、遠ざかっていく。

セラスは外套を掻き抱いて身を縮めた。布の下で、股の間がじわりと熱を持つ。さっきの男の声が——あの低い声が腹の底に落ちて、そこから下に響いた。

(……なんだよ、今の)

自分の身体が、知らない反応をしていた。

三日後にセラスは神殿の要人の前に引き出された。「第七聖女」として。

侍女から聞かされた事情は荒唐無稽そのものだった。百年の空位。劣化する結界。カントの身体を持つ者だけが女神の依代となれる。国民数万の命がかかっている。拒否権はない。

(カントの身体、って——こんなバグった肉体の名前がそれかよ)

白い聖衣を着せられて広間に立つ。左の腰骨には転生時に浮かんだ紋様——聖女の烙印がうっすらと光っていた。

広間にあの男がいた。

ヴォルフ・ゼーヴァルト。神殿騎士団長。祭壇の夜の男。

礼式通りにセラスの前に跪く。差し出された右手を取れ、と侍女に促されて、恐る恐る手を重ねた。

ヴォルフの手のひらは硬くて熱い。剣胼で覆われた掌が、セラスの細い指を包む。

次の瞬間、乾いた唇が手の甲に触れた。

「——っ」

唇は冷たいはずなのに、触れた箇所から熱が走った。指先から腕を伝い、背骨を降りて、下腹部に落ちる。とろ、と溶ける感触。カントが、疼いた。太腿の内側がじわりと湿る。

（は——嘘だろ、手の甲に唇が触れただけで——）

指先が微かに震えた。ヴォルフの薄い青の瞳が一瞬だけ鋭くなる。気づいた。絶対に気づいた。

けれどヴォルフは無言で立ち上がり、感情のない声で告げた。

「五日後の新月に、第一回の浄化の儀を行う。俺が執行者だ。それまでに身体を整えておけ」

「整えるって——」

セラスの問いには答えず、背を向けて去っていく。広い背中が扉の向こうに消えるまで、下腹の疼きは収まらなかった。

翌日。

「初めまして、聖女様。異端審問局筆頭審問官、レオニード・クラウスと申します」

蜂蜜色の巻き毛。金茶の瞳。穏やかな笑みを浮かべた美貌の男が、セラスの塔の居室を訪れた。

ヴォルフとは何もかもが違う。柔らかい口調、洗練された所作、話していて緊張しない。前世の感覚が「まともに話せる人間がやっと来た」と安堵する。

「この世界には戸惑う事ばかりでしょう。何でもお聞きください」

「あんたは騎士団の人間じゃないのか？」

「審問局は神殿とは独立した機関です。百年ぶりの聖女出現ですから、その正統性を確認するために参りました。堅苦しい言い方をすると、適格審査ですね」

レオニードは小さなテーブルの向かいに座り、茶を啜りながら話した。だが話題が変わった瞬間、空気が変質した。

「ところで聖女様。この身体には——もう慣れましたか？」

「……どういう意味だ」

「天与の門。つまり——ご自分で触れてみたことは？」

「っ——」

セラスの頬に血が昇った。レオニードの金茶の瞳が、笑んだまま動かない。

「触ってない」

「そうですか」

レオニードは手帳を取り出し、何かを書きつけた。笑みは変わらない。

「適格審査の一環として、身体の検分を行う必要があります。浄化の儀の前に、あなたの器が啓示に適うものか確認しなければなりません」

「検分って——」

「直接触れて確認します。審問官としての職務権限です」

セラスの背筋が冷えた。レオニードの笑みの下に、別のものが透けている。

「……ご安心ください。記録は厳密に管理されますから」

この日は検分の日取りを決めるだけで終わった。立ち上がったレオニードが、ふと手を伸ばした。セラスの顎を指先で持ち上げ、瞳を覗き込む。

「綺麗な翡翠だ。リーティスのご加護がよく表れている」

指が離れてからも、触れられた顎がじんと熱い。その熱が喉を降りて、鎖骨を滑り、カントに届く。

(——またかよ。触られただけで)

セラスは唇を噛んだ。前世では、誰に触れられてもこんな反応はしなかった。この身体になってからだ。男に触れられるだけで、カントが勝手に疼く。

認めたくない。認めてたまるか。

浄化の儀の二日前。沐浴の回廊。

薄暗い地下に温い湧き水が流れている。壁に沿った浅い水盤の中に身を沈め、セラスは初めて、自分のカントをまじまじと見た。

細い指で、そっと触れる。

「——っ♡」

電流みたいなものが背骨を駆け上がった。反射的に手を引く。指先がぬるりと濡れていた。

（嘘だろ……一瞬触っただけで、こんなに……っ）

水面に自分の顔が映っている。瞳が潤んで、唇が薄く開いて。情けない顔。男の顔のくせに、こんな色に染まっている。

もう一度、触れた。今度は少しだけ長く。割れ目に沿って指の腹を滑らせると、とろりと蜜が溢れて湯に溶けた。

「……は♡っ……やば……」

クリトリスに指先が掠めた瞬間、腰がびくっと跳ねた。水盤の水が大きく波打つ。自分の声が低い天井に反響して、耳まで赤くなる。

（こんな身体で浄化の儀なんか受けたら——ヴォルフに触れたら——）

水面に映る自分の顔から目を逸らした、その時。

水盤の向こう側の暗がりに、気配があった。

ヴォルフが立っていた。壁に背を預け、腕を組んで。いつからいたのか分からない。

「……すまない。声がしたから確認に入った」

「っ——、見たのかっ！」

反射的に水盤に身を沈めたが、浅い水では何も隠れない。ヴォルフの視線がセラスの腰骨の烙印を捉え、そこから太腿の付け根を掠めた。一瞬だけ。

ヴォルフは無言で背を向ける。去り際に、低い声。

「五日後ではなく、明後日に前倒しする。結界の劣化が想定より早い」

その声が微かに掠れていたことに、セラスは後になって気づいた。

(あいつ……見てたのか。俺が自分で触ってるところ、を)

水面に映る自分の顔が、どうしてもなく淫らに見えた。

浄化の儀の前日。レオニードの身体検分。

審問の間は真っ白な部屋だった。壁一面に聖典の文字が刻まれ、天井から銀の鉢が吊り下げられて、聖水がゆっくり揺れている。一方の壁に——巨大な銀の鏡。「真実の鏡」。

長椅子にセラスが座り、レオニードが正面に立った。手帳と羽根ペンを持って。

「では、聖衣を脱いでください。全身の確認が必要です」

「……」

「嫌なら騎士団長を呼んで立ち会わせましょうか？ そちらのほうがお嫌でしょう」

脱ぐしかなかった。聖衣の紐を解き、肩から滑り落とす。銀の鏡に全裸の自分が映る。正面のレオニードと、鏡の中の自分。

羽根ペンが動き始める。

「烙印の位置、左腰骨。形状は典型的な聖印。肌理は細かく、体毛は薄い。胸部は平坦、乳首の色素は淡い桃色」

読み上げられる自分の身体の特徴。一つ一つが記録されていく。事務的だった。事務的すぎて、逆に耐えられると思った。

「では、天与の門の確認に移ります。脚を開いてください」

身体が強張った。太腿を閉じたまま動けない。

レオニードが長椅子の前に膝をつき、セラスの膝に両手を当てた。掌は温かくて、指が長い。

「聖女様。これは審問記録に残る公式な検分です。抵抗は審問妨害として記録されますよ」

柔らかい声。穏やかな笑み。有無を言わさない内容。

セラスは齒を食いしばって、脚を開いた。

「よろしい」

レオニードの指がカントに触れた。温かい指先がゆっくりと割れ目をなぞる。上から下へ、丁寧に。

「外陰部の形状は通常的女性器と同等……」

羽根ペンが動く。記録している。触りながら。

「感度を確認します。ここに触れますね」

指先がクリトリスに当たった。

「ひっ……♡」

身体が跳ねた。銀の鏡に——脚を開いて審問官に股間を触られ、口を開けて喘いでいる自分が映っている。

(やだ……っ♡ 鏡に、全部……っ♡♡)

「反応あり。記録しました」

レオニードの声は変わらない。冷静で、丁寧で、だからこそ残酷。

指の腹がカントの入口の縁を撫でる。くるり、くるり、と。愛液がじわりと滲んだ。

「分泌確認。正常です。では、内部の深度を——」

「ま、待って……っ♡」

「記録のためです。指一本だけですから」

細い指がするりと中に入った。

「あ——っ♡♡」

甘い声が零れて、慌てて両手で口を塞いだ。鏡に映っている。審問官に指を入れられて、顔を歪めて、手で口を押さえている自分。

(見たくない……っ♡なのに鏡から目が離せない……っ♡♡)

「深度は十分。内壁の感度も——ああ、ここですね。声が変わりました」

レオニードの指がカントの中の特定の箇所を撫でた。指先が僅かに曲がって、柔らかい壁を搔くように動く。腰がびくんと跳ねる。

「こ……声が変わったとか、書くなっ……♡」

「事実を記録するのが審問官の務めです。この箇所への刺激で分泌量が増加、声は半音上昇——」

「やめろ……っ♡♡ 言うな……っ♡♡」

「聖女様。嘘がつけないのは私の職業病でしてね」

レオニードの指が中でくるりと回った。内壁を万遍なくな
ざるように。背中が長椅子に沈み、脚が勝手に開いていく。

(なんで……っ♡ 指一本で……こんな……っ♡♡)

男の身体のはずだ。男の意識で、男のプライドで——こんな場所を弄られて気持ちいいなんて認められるわけがない。なのにカントは正直だった。レオニードの指を咥え込んで、ぬるぬると締めつけて、止まらない蜜を吐き出している。

レオニードが指を抜いた。濡れた指先を持ち上げて、セラスの目の前に掲げる。透明な糸が指と入口の間で伸びて、ぷつりと切れた。

「聖女様の身体は、浄化の儀に十分耐えうる器です」

笑みを浮かべたまま、立ち上がる。

「おめでとうございます」

金茶の瞳の奥で、何かが煌めいた。審問官の笑みとは違う色。だがセラスにはまだ、それを読み解く余裕がなかった。

太腿が震えている。カントの奥がきゅうきゅうと締まっては緩むを繰り返している。指一本入れられただけで、身体はもう、次を欲しがっていた。

新月の夜。

黒曜石の祭壇の間。天蓋のない円形の部屋に、星明かりだけが降り注ぐ。

セラスは白い浄化衣一枚で祭壇に横たわった。薄い布の下に何も着けていない。黒曜石の壁に自分の輪郭がぼんやり映るが、新月のため暗く、はっきりとは見えない。

足音。ヴォルフが入ってきた。

白い外套を脱ぎ、軍装の袖を捲る。聖油の壺を手に取り、掌にたっぷりと広げた。

「始める」

一言だけ告げて、セラスの額に手を置いた。聖油の冷たさと掌の熱。額から眉間を降りて、鼻梁を通り、唇の上を掠める。

首に移る。太い指が耳の下から鎖骨へ滑り、聖油の筋が首筋に光った。

「……っ」

胸。浄化衣の前を開き、平坦な胸に聖油を塗る。掌が鎖骨の下から肋骨に沿って広がり——乳首を掠めた。

「ん……っ♡」

「動くな」

声を殺す。ヴォルフの手は止まらない。腹に降りて、臍の周りをなぞり、腰骨の烙印に聖油を擦り込む。烙印がほのかに発光した。

太腿の内側。硬い指が聖油を塗り込みながら、じりじりと上がってくる。

「最後だ。門を開く」

浄化衣の裾をめくる。カントが露わになった。

冷たい夜気が触れて、反射的に脚を閉じようとした。だがヴォルフの手が膝の内側を押さえ、開いたままにする。聖油をたっぷり含んだ指が、カントの割れ目に沿って、ゆっくりと滑った。

「あ——っ♡♡」

「声を出すな。神殿の外に響く」

無理だった。聖油のぬめりとヴォルフの硬い指の腹が、カントの隅々まで撫でていく。指先がクリトリスを見つけ、正確に、ゆっくりと円を描いた。

「あ♡ ヴォルフ……っ♡」

「騎士団長と呼べ」

「き、しだんちょ——あ♡♡」